もあるが最近は少ない。報道によれば人民解放軍は、衛星通過時の対処について訓練指導が徹底しているようだ。通常弾頭は、ロケット部隊の駐屯地内にはないと判断されるが、必要数は保有しているものと推定される。

豆の町（ビーンタウン）からこんにちは（第3回）

会員家族　住井　円香

■100年続く音楽の伝統

約3週間の冬休みが明け、1月から春学期が始まりました。1月はボストンで最も寒い月といわれています。日本から戻った日には雪が降っていたため、スーツケースを滑らせないように足元に気を付けながら寮に入ることになり、ボストンの冬の洗礼を受けたように感じました。

ボストンに着いて早々、翌日にはこの冬からキーボード担当として参加することにした「ペップバンド」という学内団体の新メンバー向けミーティングがありました。ペップバンドは、スポーツの試合で応援する吹奏楽部のような存在です。私が通うボストン大学では、男女ぞれぞれのアイスホッケー、バスケットボールのホーム試合で主に演奏しています。2月には、男子アイスホッケーの試合の休憩の時間に、氷上で演奏するアイスショーも行いました。

大学内には、他にも、マーチングバンド、ジャズアンサンブルなど、計11のバンドがあります。中にはオーディションが必要なものもあるものの、音楽専攻以外の学生も参加できるようになっています。

ボストン大学のバンドは歴史が古く、その成り立ちはおよそ100年前に遡ります。軍以外の学校で陸海空軍および海兵隊の将校を養成する予備役将校訓練課程がボストン大学に設置され、その一環として、約30人が参加するマーチングバンドが設立されたことが始まりだそうです。そのことと関係があるのかはわかりませんが、実はペップバンドと予備役将校訓練課程は同じ建物を共有しています。

バンドの実態は、日本の学校の部活やクラブによく似ていますが、公式には大学の授業として扱われています。1科目につき4単位を取得で

きる一般的な授業と異なり、バンドは基本的には1単位としてカウントされます。しかし、他の授業と同様、AからFまで、ちゃんと成績がつくので、あまり気を抜かずに頑張らねばと思っています。ただ歴史が長いため、ペップバンドが抱えているレパートリーも100曲以上あり、まだ全ての曲を覚えきれていないことは、ココだけの話にしておいてください。

■多様な授業と、時に逆転する生徒と教授のパワーバランス

新学期の授業を履修登録する際に、アメリカの大学の学生の間で人気があるウェブサイトがあります。その名はずばり、〝Rate My Professors〟。このウェブサイトでは学生が、教授に対して1～5点（点数が高いほど高評価）で評価し、どんな授業でどんな人柄の教授だったかというようなコメントを残します。コメントを書き込む学生の多くはその授業で得た成績も公開しているため、教授の採点がどのくらい厳しいかもあらかじめ知ることができます。どうしても、良い成績を収めた学生が教授を高く評価するのに対し、望んでいた成績ではなかった学生は教授を低く評価する傾向にあり、コメントの客観性には少し欠けるように見えるときもあります。しかし、このウェブサイト自体1999年から作られたもので、既にかなりのデータの蓄積と実績があり、アメリカの大学に通う学生にとってはこのサイトはごく一般的な存在にもなっています。

そして何よりも、普段は評価をする側の教授たちの立場が一転して、学生から評価を受ける側になるこのウェブサイトの存在は、就職や大学院進学の時には日本よりも成績が大きく考慮されるといわれるアメリカの学生にとって、非常に心強い味方になっています。教授たちがこの学生たちの評価を意識しているかどうかはわからないのですが、ウェブサイトを使うことで、評価の平均点が高い、つまり支持されている教授の授業を受講することで、納得いく講義を受け、できるだけ良い成績の維持に努めようという学生がとても多い印象です。

かく言う私もこのウェブサイトを使い、一般教養科目で必須のライティングの授業を選びました。ボストン大学では、ライティングの授業を重視していて、全専攻の学生が履修しなければならないものです。そして一律に論文の書き方を学ぶのではなく、様々なトピックのライティングの授業が用意されています。

例えば、私の授業は「アメリカの対話：ユダヤ教徒と黒人の関わりについて」というテーマのものです。昨年10月のイスラム教原理主義の軍事組織・ハマスによるイスラエルへの攻撃後、アメリカでユダヤ教徒やイスラム教徒といった宗教的マイノリティに対する風当たりが強くなっている中、アメリカでのマイノリティの置かれた環境や背景に関心が強くなったことも授業選択理由の1つですが、教授に対する学生の評価が最高の5点だったところにも大きく惹かれたことは否めません。

ちなみに、この授業を教えるイングリッド・アンダーソン教授の専門はユダヤ教神学で、ノーベル平和賞を受賞した、ホロコースト生存者のエリ・ヴィーゼル教授のもとで長年研究をしました。ヴィーゼル教授は2016年に亡くなりましたが、エリ・ヴィーゼル・ユダヤ学研究所の副所長でもあるアンダーソン教授が時おり話すヴィーゼル教授のエピソードを介し、その人柄や業績を伺い知ることができ、とても貴重な学びの機会だと感じながら、授業に臨んでいます。

■応援が白熱する氷上の格闘技

アメリカのスポーツ界で、アメリカンフットボールが花形とされていることをご存知の方は多いと思いますが、ボストン大学では、アメリカンフットボールのチームは1997年に廃止されています。とはいえ、大学におけるスポーツ人気は決して低いわけではありません。

代わりに人気が高いボストン大学の男子アイスホッケーチームは、全米トーナメントを5回制し、約40人のオリンピック選手を輩出した強豪です。金曜日や土曜日の夜に行われることが多いホームゲームでは、7200席あるアリーナがほぼ満席になります。

特に盛り上がるのが、毎年2月に行われる「ビーンポット大会」です。この大会では、ハーバード大学、ノースイースタン大学、ボストン・カレッジ、そしてボストン大学といった、ビーンタウンことボストン周辺の4大学の男女アイスホッケーチームが

ボストンナンバー1の座を争います。試合も、ボストンのプロアイスホッケーチーム、ボストン・ブルーインズの本拠地、TDガーデンで開催され、大学関係者以外の観客も多く集まります。

ビーンポット大会において、ボストン大学の学生の一番の注目は、最大のライバル、ボストン・カレッジとの試合です。両校は同じ大通りに面し、地下鉄の路線が同じ、大学名にボストンを冠する、といった共通点は多いものの、校風は対称的とされています。プロテスタント教会メソジスト派の牧師らによって設立され、現在公式には無宗教のボストン大学に対し、ボストン・カレッジはイエズス会によって創設され、現在も学生の約7割がカトリックを信仰しているそうです。また、ボストン大学がボストン市内に溶け込んだロケーションである一方、ボストン・カレッジがあるのは閑静な郊外になります。

そんな両校の試合では、当然応援合戦も熱が入ります。お互いに「滑り止め」と野次を飛ばしたり、キリスト教色が強いボストン・カレッジのことを「日曜学校」と呼んだり、相手チームを揶揄する内容が多い応援にはとても驚きました。また私の大学では、自分たちのチームの選手にペナルティが課されたときには、審判に対し、「異議あり！　○○は彼／彼女の人生で一度も間違った行いをしたことがありません！」（○○は選手の名前）と声を上げるのも〝お約束〟となっています。

今季のビーンポット大会は、ボストン大学男子アイスホッケーチームは準決勝でライバルのボストン・カレッジには勝利を収めましたが、決勝でノースイースタン大学に敗れました。女子チームも準決勝でハーバード大学に勝ちましたが、決勝で同じくノースイースタン大学に敗北を喫し、ボストン大学にとってはちょっと残念なビーンポット大会となりました。

広告目次

㈱セレモア……表紙4
㈱東京都民互助会……表紙4
㈱住販……8
㈱和泉家石材店……40
行政書士・海事代理士
安江聖也事務所……40
信和株式会社……40
㈱武蔵富装……53

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。